

Title	A・ マッキンタイヤー著 『ヘルベルト・ マルクーゼ : その思想の解明と論争』
Sub Title	A. MacIntyre, Herbert Marcuse : an exposition and a polemic
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1971
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.44, No.8 (1971. 8) ,p.133- 136
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19710815-0133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Alasdair MacIntyre,

Herbert Marcuse:

An Exposition and a Polemic.

New York, The Viking Press, 1970, 114pp.

A・マッキンタイヤー著

『ヘルバルト・マルクーゼー』

その思想の解明と論争』

マルクーゼの『理性と革命』は、ヘーゲル哲学の核心をその批判的方法、つまり現存するものを否定性の見地から理解する弁証法的方法として捉え、それがマルクスの思想に継承され、歴史的に、特殊化し普遍化されていった社会理論の形成過程を論じたユニークな作品であった。しかも一九四一年という時点で、反動的な哲学と政治運動の渦中にありながら、学術的な芳香を放つすぐれた労作として評価されたものである。だが、それから十数年、一九五四年にエピソードが付され版が重ねられているが、その叙述のなかには、今日のマルクーゼのニュー・レフトへの託宣を告げる予言者の形姿が、そして己れ自身を淪落の淵に沈めるかのごとき狂態が窺われる。

紹介と批評

ヘーゲルは、精神の生命を、したがって理性の生命を、「否定の力」のうちに見た。この否定の力とは結局、「現存するもの (positive)」が自由における進歩にとって障害となるやいなや、それを拒否することによって、発展してゆく可能性に応じた、既成の事実を把握し、変革する力であった。……最近の産業文明の進歩には、事実、否定の力の……衰退が伴っていた。経済や政治や文化の統制が、ますます集中化されて力をましてゆくにつれ、これらの領域における対立は、鎮められて調整された、あるいは除去された。矛盾は、現存するもの (the positive) の肯定によって吸収されてしまったのである。一八一八年、民族解放戦争が終つたとき、ヘーゲルは「政治問題」や「他のすべての関心を自己のうちに呑みこんでしまった国家」に対して、「真理への勇氣、思想への勇氣、最高の価値としての精神力を主張するよう、学生を上げました。今日では、精神はちがった機能をもつていふように思われる。すなわち、精神は、現存するもの、さまざまな力を組織し、管理し、予想し、また、「否定の力」を除去するに役立つ。理性は、みずからを現実と同一化した。……産業上の先進諸国においては、世紀の変わりめ頃から、内部的なもろもろの矛盾は、次第に能率的に組織化されるにいたり、プロレタリアートの否定の力はだんだんそがれていった。少数の「労働貴族」ばかりでなく、労働者階級の大部分が既存社会の肯定的部分になつていった。……資本主義的な生産力の発展は、革命的な意識の発展を妨げた。生産技術の進歩は、欲望や満足を増大させたが、他面、その利用は、欲望とその満足とを抑圧的なものにした。つまり、欲望や満足自体が服従と支配を支えているのである。

(『理性と革命』 梶田啓三郎他訳 (岩波書店) 四七二―四七四頁。)

右の文章から「エロスの文明」(一九五六年)、『ソヴェト・マルクス主義』(一九五八年)、そして大著『一次元的人間』(一九六四年)ま

で、マルクローゼの思想展開は一直線に流れる。最後の書を除き、その他の論文集を含めて、彼の著述はほとんど邦訳され、一種の *Mode Philosophie* となっていることは周知のとおりである。「拒絶の精神」「根源的な問いかけ」「思想の原点」……わが国の知識人たちは、若き反抗者たちとともに、マルクローゼのペンシスティックな確信？の深みに誘い込まれているかのようだ——勿論生き永らえることも覚束ぬ者が、それでも真に自己一身を顧みず、信念から湧きあがるその知的誠実さと高潔さに、彼らが琴瑟相和することに異議をさしはさむ理由は毛頭ないけれども。

前置きが長くなつてしまつたが、A・マッキンタイヤーの『マルクローゼ』論は、まことに一日で読めるほどの小冊子ながら、随所に鋭角的な問題提起がなされていた。論争的な解明の書というに相応しい。「マルクローゼの述べているところは正しいのか？本書で私の基本的主張は、マルクローゼの主要な立場の殆んどすべてが偽りであるということだ」、と彼は断言して憚らない。そして例えば、「『一次元的人間』の中心的衝奇性とは、一体それが書かれて然るべきものであつたのかということだ。もしもそのテーゼが真であるとするれば、われわれは、いかにしてそれが書かれるに到つたかを問うてみるべきであり、また、それがどんな読者層を見つけるだろうかと、しかと詮索せねばなるまい。というよりはむしろ、この本が読者層を見つけるかぎり、まさにそのかぎりにおいて、マルクローゼのテーゼは支持されないのだ。マルクローゼのテーゼは、『技術的進歩が、支配と画一化の現体制全体に拡大化されれば、体制に反対す

る諸力を和解させ、労苦と支配からの自由という歴史的展望の名のもとに、一切の抗議を敗退もしくは拒否するかにみえる生命の（そして権力の）諸形態を創りだすわけなのであるから。”思想をえも、社会生活の批判のための源泉をあたえないように、隸属させられてしまつている。体制維持の利益のための社会的統制が、かくも威圧的なものであるとすれば、マルクローゼの本とても、どうしてこの統制を免れていられようか？」と。ちなみに、『一次元的人間』の序論は、「批判の麻痺——反対なき社会」と銘うたれている。

マッキンタイヤーは、マルクローゼの初期作品——一九三四年から三八年のあいだに *Zeitschrift für Sozialforschung* に発表された諸論文（英文ではその一部が *Negations: Essays in Critical Theory*, Boston, Beacon Press, 1968 として収められている）から、先に掲げた主要作品全般にわたつて、犀利な批判の鋒を向けている。そこには、エロティックな両義性や仮面が、老醜の腐爛がもの見事に曝けだされている。先ず彼の提示する若干の問題点を要約してみると、マルクローゼの手法は、学問的であると同時に文学的であり、捉えどころが無い。これは、ドイツの教授に共通した性格で、その体系的理論に確固たる事実証拠が充分でなく、たとえ例証として引照されている場合でも、われわれを眩惑しがちである。第一に、マルクローゼの真理の準拠とは何であろうか？あるがままの事実ではない、少なくとも経験的な真理概念は拒絶されているのだ。第二に、マルクローゼの文化および哲学思想に対する極度に選択的な見解である。ロック、ヒューム、パークレー、デイドロなどは抹殺され、時代の文献

は恣意的に解釈されがちである。第三の決定的な問題は、哲学と政治的・社会的コミットメントとの関連性——これはいかにして確定されるのか？ 一例を挙げれば、現象学と経験論の実証主義とが全体主義的イデオロギーに移行するという問題、その確からしさは事実問題というより、価値評価なのである。第四番目は、マルクラーゼの立場と古典的マルクス主義者のそれとの関係である（同様のことは、彼とフロイトについても言えることで、マッキンタイヤーは、いわゆる「フランクフルト学派」に共通する批判理論にそれを指摘している）。マルクラーゼは、資本主義の経済的・歴史的分析にかかわるよりも、むしろ政治的コミットメントに、しかも社会的存在としての人間よりも「人間」の抽象性により多くの関心を抱いているかに思われる（したがって、剰余価値の搾取に代つて、過剰抑圧による支配と人間疎外にアクセントが置かれているのも当然である）。マッキンタイヤーによれば、この点はきわめて重要だが、マルクラーゼは少壮ヘーゲル学派に酷似している。批判という度重なる口づさみが、彼らの顕著な特徴であつたことは何よりもその証左である。それゆえに、マルクラーゼは post-Marxist ではなくして、pre-Marxist であるといわれるのは注目に値しよう。

以上の最後の点に関しては、マルクラーゼのヘーゲルおよびマルクス解釈に如実に示されているようだが、つまり、絶対理念を無批判に容認して、マルクス主義と接合するという点において、フロイトの哲学的解釈にしても同様、過剰抑圧——実行原則という概念を導入しつつ、反転して諦念と禁欲からの解放というエロスの人間のイメージ

は、フロイトの文明論を遙かに逸脱している。エロスの人間のメタファーは、少壮ヘーゲル学派、とりわけ前マルクス主義的なフォイエルバッハの感性的人間論——『将来の哲学の根本問題』を想起せよ——に繰り返しあらわれるテーマにほかならぬ。『ソヴェト・マルクス主義』における論理も同じである。ソヴェトの否定的側面——現実のスターリニズム批判として有効性を発揮していることは事実であるとしても、歴史的運命からマルクス主義を切断して、純粹に理想化されたマルクス主義理論によつて、当の現実を判断するということは、またもや少壮ヘーゲル学派の復活である、とマッキンタイヤーは指摘する。ところで、否定的思惟が創造的社会批判の根源であることを、「超越」への存在の飛躍をあえて提言する「術奇性」は、先にも触れた『一次元的人間』にたゞようマルクラーゼのもつとも矜らしげな貌相である。高度産業社会における一次元的ベシミズムは、ネオ・ファシズムの全体主義的支配に通ずる危険を胚胎している。しかも、この挫折と幻影の彼方には、あたかも「幸福な意識」に充滿したユートピアが横わつているかの如くに。エロスの文明とはどのようなものを予想しているのか？ マッキンタイヤーは問う、「性的に解放された状態のなかで、われわれは現実は何をなすのだろうか？」「もしも性が解放されたとしても、性行為の性格にどんな差異があるのだろうか？」「このような関係はもはや支配の関係ではなからうし、したがつて過剰抑圧は終焉するであろう。だが、この種の社会関係とは一体どんなものであろうか？ 現在の社会関係とどう違うのか？」と。マルクラーゼは、この点で、ウィルヘ

ルム・ライヒよりは詩的であらうけれども。

一九六九年に、マルクーゼは『人間解放に関するエッセイ』を書いている。そこに描かれたユートピア構想こそ、彼の一期の詩魂を仄めかしているようだ。そしてそれは、『エロスの文明』のナルキソスとオルフェウスの棲む世界であるだろう。

オルフェウスよ 僧侶にして神にかわりて語れる者

野に在りし人を殺害者と粗野な糧から守りし者

かくて虎や獅子の

荒き心を鎮めし者 と呼ばわれぬ

太古の代には詩人のつとめ

知慧ある者のつとめ

公と私とを

聖き物と汚れし物とを

はつきり分つものは

性の迷いより生れる病いを防ぐのは

妻なりし人のために法を定むるのは

町を造り板に法を刻むものは

(『エロスの文明』南 博訳〔紀伊国屋書店〕一五五頁)

オルフェウスとナルキソスのイメージは、「偉大な拒絶」の象徴であり、美学的イメージである。それは内奥の魂の解放ではあろうけれども、人間解放であらうか。そこにはまったく主観主義的アナキーに染まつた無秩序が出現しよう。マッキンタイヤーが正しく指摘するように、それこそレーニンの深く誠めた左翼共産主義の小

児病であらう。「少壮ヘーゲル学派の哲学、マルクス主義の修正された断章、フロイトの超心理学の切れ端——これらの素材からマルクーゼは、その先駆者たちと同様に、自由と理性という偉大な名を、あらゆる点でその内実を裏切りながら、喚起するひとつの理論を生みだしている」。マルクーゼの欺瞞性を、マッキンタイヤーはかく曝露して本書を閉じる(非理性と革命であらうか!)

浮び漂う幻想と迷宮——思想というものには、或る時にはそのような芸術性が必要でもあらう。しかし、それは自己の心象にのみとどまつていることは許されまい。マッキンタイヤーは、*Against the Self-Images of the Age: Essays on Ideology and Philosophy* という書を間もなく刊行する予定であると聞く。ふたたび紹介の機会を待ちたい。

(奈良 和重)